

「信の根拠」 岩崎道與

ある本に載っていた、忘れられない話がある。

トリノの聖ヨハネ大聖堂には、磔になったイエスの遺体を包んだとされる聖骸布がある。その真偽をカトリック教会は正式に鑑定しようとしなない。その理由は、鑑定の結果、それが偽物であることが判明するのを恐れているからではない。仮に、それが偽物であったとしても、カトリックの信仰にはダメージはない。逆に、信仰にとってダメージとなるのは、科学的に本物であると実証され、それを信仰の拠り所にした時だ。それは「信じる」ことではなくなるからだ。信じるということはまだ自明でない段階で、それを受け入れることでなければならない。それには「飛躍」が要る。

こういう話しであった。科学的に証明されたから受け入れる。この瞬間に「信」の根拠は崩れていく。確かさを求めることで、反対に信が不確かになる、というこの話しは、「あなたはなぜ神様を信じるのか?」「あなたは何を根拠に神様を信じるのか?」という問いを突きつける。この問いにあなたは答えるだろう。「実際におかげを頂いたことがあるから」。ならば再度問う。「その時あなたは何故神様を信じて祈れたのか」。それには「教会の先生のお話を聞いて」「親の信心の姿を見て」など、その人が信ずるようになった理由を答えるだろう。「では、先生はなぜ」「親はどうして」。そうやって問いを重ねていくと、つまり、あなたのとことろに届けられたこの「信心の道」をさかのぼっていくと、とうとう教祖金光大神にたどり着く。

ではなぜ教祖は神様を信じたのか。

42 歳の大病で教祖は神様に語りかけられる。「お前はこうして災難から逃れようとしていただろう」と。これを聞いた教祖は気がついた。「難儀の中でも、神様はずっと私のことを見て、祈っていた」と。これが教祖の信の根拠である。己を越えた大きな神様の祈りと働きがあり、その一方で、それに気づかないでいた己の浅はかさという凡夫の自覚。極大な神様と、極小な自分。この圧倒的な落差が教祖の中に信じるという心を生んだ。この落差が「信」を生み、それをジャンプ台に、教祖は何もかも捨てて神様の懐に飛び込んでいった。その信が教祖を救った。助かりを生んだ。そしてその助かりが取次の道を生んだ。群れが生き延びるために、危険が潜む海にまっさきに飛び込む **First Penguin** のような教祖の姿（生き方）と、その教祖が語る助かりの話し（教え）を信じて、後に続く者、そう私たちも天地という神様の懐に飛び込むことになった。とりわけ、各教会の初代は、それぞれの布教地という海に飛び込んでいった。

教祖の生き方と教えを信じて飛び込んだ者は、教祖と同じように大きな神様と出会わされることになる。それは小さな自分との出会いでもある。こうして自分の中に生じた落差が、ますます私たちの信を確かなものにしていく。

私たちが唱える **Kami Prayer** の前半は **Reverently** で始まる。そして後半は **Humbly** で始まる。この **Kami Prayer** を唱える度に、大きな神様が立ち上がり、小さな自分が姿を現す。その度に信が生まれる。